

後期旧石器時代におけるレヴァントおよびヨーロッパ地域の放射性炭素編年 Upper Paleolithic Radiocarbon Chronology in Levant and Europe

大森 貴之^{1*}, 米田 穰¹

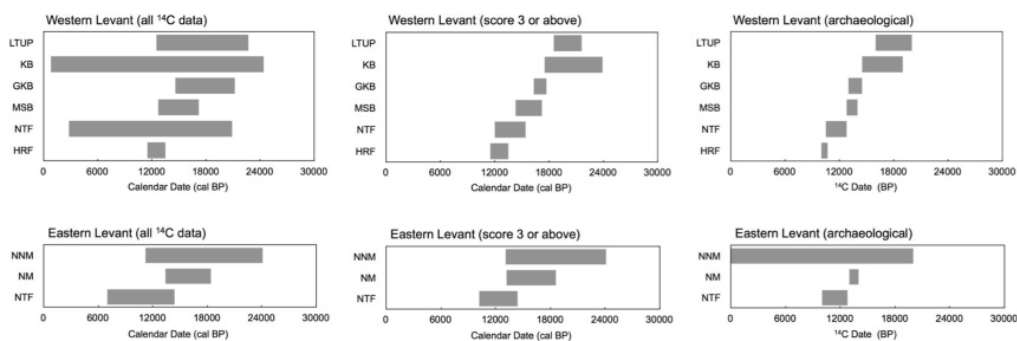
OMORI, Takayuki^{1*}, YONEDA Minoru¹

¹ 東京大学 新領域創成科学研究科

¹ Graduate School of Frontier Sciences, the University of Tokyo

研究項目 B02 のなかで、我々は理化学年代データベースの構築を担当している。ネアンデルタールの絶滅と後期旧石器の拡散については、これまでも理化学年代の集成が考古学者によってなされている (e.g. Bar-Yosef 2002)。しかし、これらの総説では、近年の年代測定技術における進展を評価に加えておらず、年代学的観点から信頼性に疑義のある年代が含まれている危険性がある。我々は、2011 年度から後期旧石器時代レヴァント地域の放射性炭素年代を対象に年代値の精査を開始し、ヨーロッパまで調査地域を広げている。年代データの測定技術、測定試料の種類や出土層位の信頼性の観点から、測定値の信頼性を 5 段階で評価している。書誌情報を含む全データは、研究項目 B02 の Neandat データベースで管理している。遺跡や石器製作伝統の存続期間を詳細に議論するため、精査した ¹⁴C 年代を暦年代へ変換し、校正年代を足し合わせた累積年代をもとに、それぞれの存続期間を導出する。

図にはレヴァント地域における後期旧石器時代から亜旧石器時代の ¹⁴C データ (Byrd 1994) から、各石器製作伝統の存続期間推定を、全データ、スコア 3 以上のデータ、および考古学的に評価したデータから導出した結果を示した。年代の精査から、考古学的に構築された編年と相対的に整合する結果が得られただけでなく、より確からしい実年代を伴った編年構築が可能であると考えられる。本手法の有用性を検証するため、既に年代学的な研究が進んでいるヨーロッパ地域を対象とした Stage3 プロジェクト (Van Andel and Davies 2003) のデータを用いて具体的な検証を議論する。



推定される石器製作伝統の存続期間。Late/Terminal Upper Paleolithic (LTUP); Kebaran (KB); Geometric Kebaran (GKB); Mushabian and Related Industries (MSB); Natufian (NTF); Harifian (HRF); Non Natufian Microlithic (NNM); Non Microlithic (NM); Natufian and Related Industries (NTF).